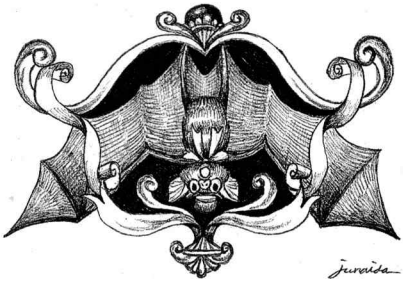
朝日 俳壇 歌壇



〈日曜日のブローチ　44〉　junaida

高野公彦選

戦前の始まりなのかもしれないと憂うひとつの党の圧勝　（観音寺市）篠原　俊則

勝ちてより牙むくやこの為政者はしれっと武器売る算段もする　（京都市）森谷　弘志

政治屋にいとも容易く騙されていつも国民はやさしき弱者　（近江八幡市）寺下　吉則

何度観て何度泣いただらうりくりゅうに二月十七日奪はれてをり　（岡山市）寺谷　和子

みっともない憲法と人は言うけれど日本にその後無かった戦争　（高岡市）梶　正明

ひつじ雲をなかよし雲と呼んでた児　戦争はいやと投票に行く　（堺市）丸野　幸子

わたくしに衛星ふたつありし日よ子はそれぞれの軌道を進む　（奈良市）山添　聖子

ユーミンを聴くのではなくユーミンが流行った頃の雰囲気を聴く　（藤沢市）小林　竜太

日常を飛び出すことが旅ならば本屋巡りも寄り道も旅　（佐伯市）川西　敦子

☆牛飼がボディブラシで一頭を掻けばつぎつぎ牛ら寄り来る　（東京都）大村　森美

【評】１首目と２首目と３首目は、さる２月８日の衆院選で自民党が圧勝したことへの危機感・憂慮・落胆などを詠む。４首目、イタリアの冬季五輪のフィギュアスケートで金メダルを獲得した三浦璃来・木原龍一ペアの演技を絶賛する歌。

永田和宏選

立飲み屋身体斜めに譲り合いするめ肴に酒のむ昭和　（三郷市）木村　義熙

泣き叫び尽くした後に人びとは無表情になる瓦礫の中で　（名古屋市）浅井　克宏

将来の夢「石ころ」と書いた手を誰も包んであげられなかった　（佐伯市）河北　苗

オリンピックにいたかもしれぬ命たちヘルメットにある数多の写真（観音寺市）篠原　俊則

一人逝きひとりが施設に碁敵も少なくなりぬ我が身めぐりに　（多摩市）柳田　主馬

光速を超えれば過去に行けるらしいやり直せたりはしないみたいだ（鹿児島市）高坂　智香

「えらいなあ女やのにな」ほめているつもりで父がつぶやく言葉　（和泉市）星田　美紀

駅ピアノのアズナブールを聴いてゐる選挙結果は見ぬやうにして　（茨木市）瀬川　幸子

ブレーキとアクセル間違え突っ込んだそれでは済まぬぞ台湾海峡（大和郡山市）四方　護

行ったこと無いけど今は面積の単位となりぬ東京ドーム　（北海道）狩野　勝弘

【評】木村さん、そんな呑み方をしていたよなと懐かしむ人も多いかも。典型的昭和の酒場。浅井さん、戦争の悲惨さの中で泣き、叫び尽くした人々は、もはや無表情になる以外はないのかも。河北さん、安倍首相銃撃の山上被告の生い立ちを思う。

川野里子選

戦場で兵を殺ししドローンが今日はミラノで選手等を追う　（五所川原市）戸沢大二郎

穏やかな性格なので殺されず生きていますとセラピー馬の目　（八王子市）額田　浩文

燃え尽きるまでが人生レッツゴー茶化して閉じる父の棺桶　（さいたま市）山口　晋裕

老人のセルフレジにて落とした杖の響かう真昼のスーパー　（三浦市）秦　孝浩

にんげんでいられる時間は危うくて蠟梅はいま黄に発光す　（福島市）美原　凍子

妹と母はドレスを試着する鏡の中の私見ている　（富山市）松田　梨子

チョコレート今でも娘がくれるなり87歳のかなしい秘密　（長野市）関　龍夫

恐竜が驚くほどの恋をするあとは僕らは滅びるだけで　（奈良市）浦城　亮祐

足し算の誤り直せと急く吾に「まあ落ち着いて」と六歳の息　（神戸市）浅田　拓史

地図にない山から先に笑い出す見知らぬ人と駅から眺む　（厚木市）北村　純一

【評】一首目、高速ドローン、今度はどこに現れるのか。二首目、他の馬は殺処分されたのだ。三首目、亡き父を「茶化」せるほどの愛がなんとも切ない。四首目、落とした杖の音は孤独の音か。五首目、蠟梅の輝きが人の脆さ危うさのようだ。

佐佐木幸綱選

冬晴れの海の蒼さよ今朝は凪ぎてはるかに佐渡の雪山も見ゆ　（柏崎市）阿部　松夫

幾年も苗植えざりし父祖の田を草刈りとりて魂鎮めたり　（大津市）安藤　韶一

☆牛飼がボディブラシで一頭を掻けばつぎつぎ牛ら寄り来る　（東京都）大村　森美

生えたての乳歯をチェックするように春の花壇を覗きこむ朝　（柏市）伊藤　智紗

あてもなくひざ掛けを編む編むという行為を楽しむそれだけのため　（横浜市）杉本　恭子

両の手をペットボトルで温めて触診なさる女医先生は　（岡山市）岩藤由美子

夕暮れの歌声響く校庭にベールのごとき野焼きの煙　（枚方市）細美　哲雄

もうばばあですわと母が言うときは聞こえぬふりし話題を変える　（久留米市）春日　登

緊張の両家顔合わせ打ち解けるきっかけは富士登山の話　（富山市）松田由紀子

突然のテレビの故障悪くない夫婦の会話意外と弾む　（武蔵野市）伊藤　二朗

【評】第一首、作者が在住する新潟県柏崎市から見る佐渡島だろう。大きな風景を大きくうたって見事な作にしあげた。第二首、しばらく放置されていた父祖伝来の田を再開するにあたって、魂鎮めの儀式を行ったのだろう。

うたをよむ　俳句は人生の暗喩

大石　雄鬼

昨年、現代俳句大賞を受賞した中村和弘の句集『荊棘』は、今の流行の句に対し硬派な独自の句集である。

目玉の曇りを舐めて大守宮

その大守宮の姿は、蜥蜴などの爬虫類の特徴的なしぐさとして誰でも想像できるだろう。「俳句のなかに私という人間を生かす」をモットーとする結社の主宰の句集ではあるが、意外に「私」や「人」そのものは出てこない。動植物を中心にした自然界や自然界と人間の接点（季語を含む）を描いた俳句が多い。

海底に白き蟹群れ良夜かな

人々にとっての良夜の下で不気味に白い蟹が群れている。背景に源平合戦の平家蟹を想起させるような句である。

自然界に見る人間社会。花鳥諷詠と言われる俳句は、もしかしたらそのものが人間社会の暗喩ではないだろうかと思えてくる。大守宮は支配者であり目玉の曇りを舐めている。曇りとは何か。良夜の下で群れている蟹とは。そこからはぞくっとする怖さが顔を出す。

流れ行く大根の葉の早さかな　虚子

高浜虚子そして俳句を代表するこの句を、単純に大根の葉のことを詠んでいると解するだけでは物足りない。そこには人生というものがそこはかとなく感じられる。だからこそこの句が心に響く。

私たちを取り囲む人間社会と私たちの人生。俳句はこの人間社会と人生の暗喩とも言える。句集のタイトルともなった、

人間の影こそ荊棘夜の秋

まさに俳句そのものが「人間の影」かもしれない。

（俳人、現代俳句協会事務局長）

風信

「第２回大岡信記念／富士山俳句大会」投句募集　実行委員会主催。題は「大岡信」「春」で１人２句まで。はがきで〒437・0064　静岡県袋井市川井1252の６、野村久さんに送るかサイトhttps://gokoo.main.jp/fuji575/に。無料。25日必着。長谷川櫂さんと村松二本さんが選。４月12日に同県三島市で開かれる大会で大賞１句と入選10句が発表される。

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は**無地のはがき１枚に１作品、横に住所、氏名、電話番号**を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます（週に２作品まで）。QRコードから。